民族的自覚への道　ー 日立就職差別裁判上申書
http://homepage3.nifty.com/tajimabc/new_page_18.htm　より少しまとめたものです。

朴鐘碩(パクチョンソク)
私は１９７０年８月、日立製作所ソフトウェア戸塚工場の入社試験に合格し、同年９月採用通知を受けたが、履歴書の不実記載を理由に解雇されました。私は日立製作所の処置に納得できないので訴訟を提起し、所信を主張してきましたが、結審に際して、私の真実の姿や考えを理解していただきたいと思い、ここに上申書を提出するものであります。

１．私の生立ち
私は１９５１年１１月２４日、愛知県西尾市で、父朴乙碩、母金南介の九人目の子供(五男)としてうまれました。

父や母は、１９２６年、それぞれ郷里(慶尚北道)をあとにして、それぞれの家族につれられて日本に渡ってきたということです。そのとき、父は１６歳、母は１３歳であり、日本に渡ってきたのは、郷里の農村では生活ができなくなったためで、生きるあてをもとめて、日本の土木工事場へやってきたのでした。
父はまず土方仕事をはじめ、家族とともに飯場などを転々としたあげく、愛知県の知多郡に往みついて鋳物工場などの肉体労働をしました。
母はくるなり、安城市のある紡績工場にやとわれ、父と結婚するまで、ずっと工場ではたらかされていたということです。

父が２３歳、母が２０歳の１９３４年、２人は結婚して西尾市中畑町に住み、いぜんとして肉体労働をつづけました。仕事が不安定で、収入はとだえがちなのに、次から次へと子供がうまれて、生活は貧窮のどん底にあったわけです。
父母は、ごくありふれた在日朝鮮人の生活をし、体をすりへらしながら、日本のお役人がいうままに、姓名も日本人らしくかえ、日本人におもねってくらすことに必死であったということでした。

１９４５年、日本の敗戦と朝鮮の解放により、父母も、親戚や知人たちとともに、当然帰国するつもりでしたが、先に帰った人たちが、仕事がなく乞食のような生活だという噂をきいて、そのまま居すわることになりました。それでも父母は、学齢期にあった長女と長男を、当時西尾市にできていた民族学校に通わせたのでした。

ところが、民族学校がつぶされ、子供たちを日本の学校へいれるようになってから、父母は、日本のお役人にさからって、日本から追い出されては大変だという恐怖感をもつようになり、ひたすら日本人らしくよそおって、家のなかでも子供たちに日本語しかはなさないような態度にかわったということでした。
私がものごころつきはじめたとき、家のなかは子供たちで、うずまっているような状態でした。長女を頭に９人もの子供がせまい家のなかでおしあいへしあいしたのです。

父は鋳造工場に通い、母は自転車で行商をしてあるいていました。父母とも朝はやく家を出て、夜おそくでないと帰ってきませんでした。

２．日本人らしく教育される
　１９５８年、私は西尾市立中畑小学校に入学しました。私は、「あらいしょうじ」とよばれました。私は同級生の子供たちとおなじく、自分も日本人だと思いました。

姉や兄たちもみな日本名で、私は、当然、姉や兄たちも日本人であると信じていました。ところが、２年生になってから、私は、自分が、同級生からみさげられる人間であることに気づくようになりました。

ある日、担任の先生が出かけて、自習をしているとき、さわいで態度がわるいということで、私ともう一人の子が、級長の命令で前に出されて立たされ、直立できないということで両足をしばられました。同級生たちは面白

がって笑いましたが、私と一緒に立たされた子は、顔をまっかにして泣き出してしまいました。その子も私も朝鮮人であったのです。私は腹が立ち、同じ学年の私のいとこにあたる子と相談して、学校の帰りに級長をまちぶせ、２人がかりでなぐってやりました。級長は泣いて帰りましたが、さっそく翌日から、私たちは「チョーセンジン、チョーセンジン」と、ののしられました。

１９６４年、私は西尾市立平坂中学校に入学しました。私の名はいぜんとして「新井鐘司」でした。自分が朝鮮人の子であることはわかっていましたが、私は、このまま勉強をしていけば、自然に日本人になるのだとばかり思っていました。それは、兄や姉たちの生活ぶりをみて、漠然とそのように考えた面もあります。

２年のときには、生徒会の役員になり、生徒の自主的な学習をすすめる学級運営のなかでは、私がいつも指導的な立場にたたされていました。そして、３年のときには級長にえらばれていました。
努力をすればかならずむくいられるという気持がつよくなり、私は、日本の社会でかならず出世してみせるという、あわい夢をいだくようになりました。

３．壁にとりまかれて
私は、アルバイトをして食費は家にいれることを条件にして、全日制の碧南高校を受験しました。５００名の受験者のなかで、私は５番で合格しました。就職のとき都合がよいだろうと考え商業科を志望したわけですが、入学時、学校から「級長新井鐘司君」と指名されたときは、多少得意な気持でした。

ある日、国語の教師が、クラス全員に、いま考えていることをノート１ページに書いて出せといいました。私は、朝鮮人は損だ、高校や大学を出ても満足に就職もできない、自分は何のために高校なんかへきているんだ、といった内容を書いて出しました。私が、日本人に向って自分が朝鮮人であることをうちあけたのは、このときがはじめてでした。

教師は私を職員室に呼んで、君の気持はわかるが、いま君にとって一番必要なことは勉強じゃないか、というようなことをいわれました。私は全然理解してもらえないといういらだたしさと余計なことを書いたという後悔の念で、うなだれたまま職員室を出ました。

４．　問題の生徒になって
高校２年の夏休みになって、私はまたアルバイトにはげむことになりました。どうせやるなら金になる仕事がいいということで、名古屋港にいって沖仲仕の仕事を世話してもらいました。昼夜二四時間通しではたらくと１万円もらえるのです。非常に危険のともなう仕事で、作業中に船底や海中におちて、瀕死の重傷をうけることもあるのですが、仕事のつらさも忘れて、私は１万円もらうことに夢中でした。１日休んで２４時間はたらくということを１０回ばかりくりかえし、私はうまれてはじめて大金をつかんだ気持になり、同年輩のいとこと共に名古屋のさかり場に遊びに出かけました。

５．進路のなやみ
３年になると、商業科にははやばやと求人申込みが殺到して、掲示板には、ところせましと申込み会社の要綱がはりめぐらされていました。トヨタ自動車関係の関連会社が多く、銀行や商事会社なども眼につきました。勿論、大部分が事務系統でした。

どうせ申込んでも、朝鮮人なんかやとってくれるところはないだろうと思いながら、私は掲示板が気になって丹念にみまわしていました。ふと中に、戸籍謄本を必要としないという会社の名がみあたりました。たしかアイビーエム・コンピューターといい、外国資本関係の会社でした。私は担当教師に、さりげなくその会社に申込めないだろうかときいてみました。するとその教師は、言下に、お前なんかはいれるところじゃないと、つめたくはねつけられてしまいました。

私は屈辱を感じ、二度と就職のことは口にしませんでした。
私の学級のなかで、進学することになった一部の生徒と家業に従事する生徒をのそいて、就職希望者は一学期のうちに全員就職先がきまりましたが、ただ一人の朝鮮人である私だけが未決定のままでした。

そういう生活を何カ月かすごすうちに、ふとある日、私は新聞で日立製作所ソフトウェア戸塚工場の募集広告をみつけました。何気なしに読んでいくうちに、私は天啓のようなものを感じました。私は胸をときめかしながら、眼を皿のようにして、募集広告の活字にみいりました。

６．入社したい一心で
私は生まれて以来、ずっと日本の教育をうけ、自分も日本人の一人として日本の社会に生きるのだと、思いつづけてきました。中学や高校で、努力さえすれば優秀な成績をあげ、日本人から尊敬されるようになるということを、ある程度体験し、自信もつけました。

私は日立の広告をみて、ある意味で、目をさまされたような気がしました。
勇気を出せ！ 日本の最高の社会は、日本の最高の技術は、君に手をさしのべている、君の才能をここで生かそうと思わないのか、と、私に呼びかけてくれているような気がしました。

私は、断然応募する決心をし、夢中になって履歴書を書きはじめました。
だが私は、はたといきづまってしまいました。
新井鐘司という名前は、それまで私の本当の名前ですから、いともすらすらと書いたものです。

私は高校生になって、はじめて、いわゆる写真をはり、人さし指の指紋をついた、外国人登録証なるものをもつことになりましたが、そこではじめて、朴鐘碩という私のもう一つの名前をしりました。しかし私は、小学校からずっと、あらゆるかきものに、新井鐘司以外の名を書いたことがありませんので、朴鐘碩という名はまったくなじみのないものです。
ところが、本籍、そこに何と書いていいか私は迷ってしまいました。
私のもっている外国人登録証には、韓国慶尚北道達城都月背面辰泉洞というところが書いてあります。しかし、そこはどんなところか、何処にあるのか、私はいってみたこともなく、想像もつかないところです。

日立の入社試験に出す履歴書に韓国と書いたら、どういうことになるだろうかと、私は考えました。

兄たちや先輩たちから、日本の大企業は朝鮮人を絶対にやとわないということを、私は耳にたこができる程きいています。

受験の安全を期すために、私は自分のうまれた父母の住所（西尾市）を本籍地として記入しました。

もし面接の人がたしかめたら、私は、かくさずに本当のことをはなすつもりでした。学科で私の実力もためされたことであり、面接で私の気持をありのままにうったえたら、理解のある人ならかならずわかってもらえるものと思いました。

私を待っていて、面接をしてくれた久保寺さんにあったとき、私は心の底からわきあがるようなよろこびを感じました。久保寺さんは、はじめから私に好意的で、やさしく、そしてていねいにたいしてくれました。大企業のえらい人だろうという気持で私は緊張していたのですが、ものやわらかいはなしかたに私はすっかりくつろいで、思いのままに答えることができました。

待ちに待ったしらせは、９月４日、日立の戸塚工場の石沢さんという人の電話でとどきました。

石沢さんは明るいはずんだ声で、私が新井鐘司であることをたしかめたのち、日立に合格した祝いをのべ、採用

通知を送ったがとどいているかとききました。

ところが、兄は意外に冷静で、沈痛な声でききかえしてきました。
お前、本籍を何と書いたか、というのです。私は、ありのままに答えました。
兄は、何もいわずに、すぐ来るようにいって電話をきりました。

とんでいった私が、採用通知をひろげてみせると、兄は暗い顔をして、おそらく日立にいっても、本当のことをいうとすぐ追いかえされるだけだろう、と、断言するようにいうのです。

しかし私は、はげしくうちけしました。天下の日立ともあろう会社が、私を試験し、私という人間を理解して採用したのに、追いかえすはずはない。私は韓国の国籍をもった朝鮮人であろうとも、日本人らしく教育され、日本人らしく生きることを目標としてきた人間を、そんなにむごいしうちではねつけるはずはない、と、私は大きな声で兄に反駁しました。それが、私の信念でもあったのです。

法律的に書類の上で証明できるのは、外国人登録証明書だけです。私は、区役所からこの証明書をもらっていくことにしました。

このときも、石沢さんが電話に出て親切に寮の説明をしてくれました。
その親切な声に、私ははげまされたかたちでした。
私の心のなかに、暗くわだかまっている兄の声を、はやくうち消したいために、私は、戸籍謄本をとれない理由と、外国人登録証明書を持参したい旨をのべました。電話はすぐにかわり、担当責任者という当麻さんが、私から事情をきいたのち、あわてた様子で、私に、採用通知は保留にするから荷物を発送するのを中止して、会社からの通知を待てという趣旨をのべました。

その日も、その次の日も、日立からの電話はなく、私は、身をこがすような思いで、ひたすら待ちつづけました。まだ暑いひでりのつづいたときでもあり、私の胸のなかはやけただれるような思いで、私はすっかり憔悴してしまいました。

たまりかねて、私は９月１７日、また日立の戸塚工場に電話をかけました。電話に出た当麻さんは、何か書類を読みあげるような事務的な声で、当社では一般外国人は採用しない、会社の規定がそうなっている、履歴書に本当のことを書かないからいけなかったのだ、という趣旨のことをいって、解雇通告をしました。

私は、担任の教師にあって事情をはなし、日立に無事入社できるようにあっせんしてもらうためでしたが、私の顔をみた教師は、すぐ、日立からお前にあきらめるように説得してくれと電話があったが、学校で世話したことではないから関係ない、といって返答をしたと、はなし出しました。

法廷でのべたように、私は西尾労働基準監督署を訪問し、山口氏からはげましをうけました。

りくつはどうあれ、私は、日立が間違っているという強い確信をもちはじめました。

７．訴訟を提起して

私は、自分のおろかさを考えないわけではありませんが、山口氏のはげましによって再度日立に電話をかけたとき、日立の人のまったく判でおしたような、おなじ口調の冷酷な言葉をきいたとき、私が日立の人のいうようにあきらめることは、私という人間の生存を否定することで、つきつめれば、私という人間の死滅を意味することだと気づきました。

あきらめないとすれば、私は、どこまでも日立の間違いを追及していくことです。

そう考えると、私は、自分の知恵だけでは思いつかないことを、多くの人々にきいてまわる必要を感じました。

　私は大勢の日本の青年たちとしり合いになりました。その人たちの激励をうけ私はふたたび、姉と友人たちを同行して、日立の戸塚工場に出向きました。

日立側はおなじ言葉をくりかえしましたが、担当者は、個人としては同情的だといい、もし日立の責任を追及する気なら、運動をおこすなり、訴訟を提起したがいいだろうといいました。

だが、私のあたらしい友人たちは、すぐ多くの仲間をあつめ、金もあつめてきました。

こうして私は、友人たちの助けを得て、日立に訴訟を提起することができました。

訴訟は新聞に報道され、さらに多くの人々が私を激励しにきてくれました。
私の事件は、民族的な就職差別として問題になりはじめました。
ところが、時間が経過していくうちに、私はだんだん自信をなくし、気持がめいりはじめました。私は人にあうのがこわくなり、ひとりとじこもって考えたい心境になっていきました。それに、私を動揺させたのは、同胞たちのなかからおこった私にたいする批判の声でした。

　戦後の日本の同化教育にすっぽりつかって、骨の髄まで日本化して、まるで民族的自覚をもたない人間が、何をえらそうに民族差別などといっているのだ。日立という日本の財閥の、搾取の道具になろうとしたあさはかな人間が、どうして民族の苦しみを語ることができるのだ。ばかなことをするやつだ、といった声が私の胸につきささりました。そういわれてみると、私は民族のことを何一つわかっていないばかりでなく、朝鮮人の本当の気持などというものも、まるでわかっていない自分に気づかずにはいられませんでした。

私はうちのめされ、自分がいやになってきました。私は、悶々とした日をすごしました。だが、そういう私を、多くの日本の友人たちは、辛抱強くなぐさめ、元気づけてくれました。

そして、私にあらたな勇気をふるいおこさせてくれたのは、あたたかい眼で私をみまもりながら、私に民族のさまざまのことを教えてくれた、同胞の先輩たちでした。

裁判が進行していくうちに、私は、証人に立って下さった先生方からたくさんのことを教えられました。

私は、おぼろげなから、民族的自覚をもつように自分を鍛錬するためにはどうすればよいかを、わかりはじめてきました。

それで私は、昨年９月、わが同胞が密集している川崎市の桜本にひっこし、毎晩、同胞たちの国語講習所に通って、祖国の言葉を学びはじめました。私は、日に日に、自分が朝鮮人の魂をとりもどしはじめたことを実感し、生きているよろこびと、甲斐を、いまさらのように感じています。

８．現在の心境
　私は、訴訟の提起の意義などということは、とてもおこがましくていえない気持です。私はただ、あまりにも幼稚で無自覚であった過去の自分の姿が、恥かしく思いかえされます。

しかし、自分が朝鮮人として自覚をたかめればたかめるほど、私が日立の不当な行為を摘発してたたかうことは、基本的に正しいことであるという自信を、いよいよ強めるようになりました。

そして私は、祖国の言葉をおぼえはじめるにつれ、父や母が苦しい生活のなかで泣きわめいた言葉に、どんなに

深いかなしみと民族の怒りの訴えがこもっていたかをしるようになりました。

かつて、父や母をつまらない人間だと思い、むしろ憎んだ私でしたが、いまになって、その父と母がどんなに苦しみと差別にたえ、せいいっぱいの愛情で私たち九人姉弟を育ててくれたかがはっきりわかりはじめました。
それを思うと、私は涙なしにはいられません。

私はこの老いた両親のためにも、不正と徹底的にたたかう強い人間になることを誓わないではいられません。

私は、日立の不正をかならずたたきのめしてみせるという自信をいっそう強めるとともに、勝つ日まで頑張りぬく覚悟であります。
１９７４年３月